

## 受動文の本質的な理解に向けて －日英比較対照分析－

### Towards an Understanding of Passive Constructions in Japanese And English

中 村 浩一郎\*  
NAKAMURA Koichiro

本論文は日本語と英語の受動文の比較対照分析により、両言語の受動文を本質的に理解する方法を示すことが目的である。受動文の先行研究における分析に、池上（1981）の日本語は「なる」型言語であるのに対し、英語は「する」型言語であるという視点を加えることによりより両言語の受動態の本質に迫る。主な論点は以下の2点である。[1] 英語では「動作主 + V + 被動作主」形式の能動文に対応する「被動作主 + V-ed 形式」の受動文があるのに対し、日本語では「動作主 + 被動作主 + V-rareru ⇒ 被動作主 + V-suru」形式を取る自動詞的構文という対応をなしていること。[2] 英語の「have + 被動作主 + -ed 型」は日本語の間接受け身に見対応しているが、実際は受動文としてよりも使役文として解釈される方が多いこと。

キーワード：受動文、能動文受動文の対応、被害受け身

Key words : passive sentences, co-relation between active and passive sentences, adversative passive

#### 1. はじめに

受動文に関しては日本語、英語共に生成文法の枠組みで多くの研究がなされている。能動文に対する受動文として理解できる部分も多いが、対応する能動文が存在しないものもある。中学校から高等学校、そして大学まで受動文に触れる機会は非常に多い。にもかかわらず、「I'm bored.」と言いたいときに「I'm boring.」と言う生徒／学生も未だに多い。本論文では、池上（1981）を出発点として、受動文に関する捉え方の日英比較を行い、その本質に迫る。更に、その効果的な理解方法も提示する。なお、本論文におけるデータは、出典を明示していないものは筆者の作例による。

#### 2. 「なる」型言語と「する」型言語

本節では、日本の言語研究に多大な影響を与えた池上（1981）を概観する。英語では能動文と受動文が対応している場合が多い。

- (1) a. John hit Mary.  
b. Mary is hit by John.

- (2) a. John loves Mary.  
b. Mary is loved by John.

(池上 (1981:218))

(1a,b) では「打つこと」という抽象的な個体がジョンからメアリーに向けて移動する。一方、状態的と特徴付けられる (2a,b) では「愛」という抽象的な連続体がジョンからメアリーに向けて移動すると特徴付けられる。池上（1981）は John を動作主／起点、Mary を被動者／到達点として捉える。一方で池上（1981）は次の例文も提示する。

- (3) a. John survived Mary.  
b. Mary was survived by John.

(池上 (1981:219))

この文は「ジョンがメアリーより長生きした」という意味であるから、何かの移動として捉えることは「一応不可能」である。更に、次の例文を見られたい。

- (4) a. I crossed the river.  
b. ?\*The river was crossed by me.

- (5) The river had been crossed (by that time) .  
(池上 (1981:220))

能動文 (4a) に対応する受動文 (4b) は非文である。この容認性の判断は筆者による。一方で「(5) のような一般論的な言い方では自然である」と池上は述べる。

次に、池上 (1981) の題名にもなっている「する」と「なる」の概念を説明していく。

- (6) a. John opened the door. :  
 使役的他動詞 = 「する」的表現  
 b. The door opened.:  
 自動詞 = 「なる」的表現  
 (池上 (1981:224))

- (7) a. A MOVE B = 「する」的表現  
 b. B BE MOVED = 「なる」的表現  
 (池上 (1981:233))

つまり、(6a) のような他動詞構文では動作主が目的語に働きかけ、「ドアを開ける」となるのに対し、(6b) の自動詞構文では「ドアが開いた (状態になった)」という「なる」的表現になっている。これは (7a) の「A が B を動かす」が「する」的表現であるのに対し、(7b) の「B が動かされる」という「なる」的表現であることと軌を一にしている。池上 (1981) は場所理論を拡張し、(7a,b) のような形態を用いている。場所理論は生成意味論の方法論につながっており、現在では Jackendoff (1990) が発端となり発展した語彙概念構造 (lexical conceptual structure) という理論的枠組みで、英語の意味構造が盛んに研究されている。更に、池上 (1981) は日本語と英語の特質を明示する例として以下を挙げる。

- (8) a. We are going to get married in June.  
 b. 私たち、6月に結婚することになりました  
 (池上 (1981:198))

池上 (1981:198) は「『結婚する』ということをして『なる』で覆うことによって、あたかもその出来事が当事者の意図を超えたレベルでおのずからなったような提示の仕方になっている」と述べる。つまり、池上 (1981) は日本語 = なる言語、英語 = する言語という対立軸に基づいて論じている。

以上、この節では池上 (1981) を概観した。次節から、能動文と受動文の比較に関する先行研究を概観する。

### 3. 日本語と英語の受動文に関する先行研究

本節では日本語と英語の受動態を比較対照している鷺尾・三原 (1997) と日本語学の観点から日本語の受動文を分析している日本語文法学会編 (2014) を概観し、そこで得られる事実と Huddleston, Pullum and Reynolds (2022) が提示する英語の受動文の特性がどう関連していくのかを述べる。

#### 3.1 鷺尾・三原 (1997)

日本語と英語の受動態を比較し分析しているこの文献では、以下の構造を出発点として比較を始める。

- (9) 日本語  
 a. 能動 : NP<sub>1-Nom</sub> NP<sub>2-Acc</sub> V  
 b. 直接受動 : NP<sub>2-Nom</sub> (NP<sub>1-BY</sub>)  $\emptyset$ <sub>2</sub> V-rare  
 c. 間接受動 : NP<sub>3-Nom</sub> (NP<sub>1-BY</sub>) NP<sub>2-Acc</sub> V-rare

- (10) a. 教え子が先生を批判した  
 b. 先生が学生たちに批判された  
 c. 先生が学生たちに論文を批判された

- (11) 英語  
 a. 能動 : NP<sub>1-Nom</sub> V NP<sub>2-Acc</sub>  
 b. 直接受動 : NP<sub>2-Nom</sub> be V-ed  $\emptyset$ <sub>2</sub> (BY NP<sub>1</sub>)  
 c. 間接受動 : \*NP<sub>3-Nom</sub> be V-ed NP<sub>2-Acc</sub> (BY NP<sub>1</sub>)

- (12) a. The students criticized the teacher.  
 b. The teacher was criticized by the students.  
 c. \*The teacher was criticized his article by the students.

- (13) a. 私は (彼らに) 入場を拒否された  
 b. I was refused admittance (by them) .  
 c. They refused me admittance.  
 (鷺尾・三原 (1997:11-13))

鷺尾・三原 (1997) によると、能動と直接受動は日本語と英語でほぼ対応している。それに対して、(11&12c) で示す間接受動の形式は英語には存在しない。(13a) は間接受動に見えるが、実際には語彙特性として名詞補部を2つ取る動詞 *refuse* の目的語 NP<sub>2</sub> が主語になったものである。(13b) は直接受動の変種である。間接受動文を持たない英語では、(10c) の内容を示すには以下のような使役形を使う。

- (14) The teacher had his article (severely) criticized by the students.  
 (鷺尾・三原 (1997:15))

しかし、鷺尾・三原 (1997) に限らず一般的に知られているように、「have+NP+V-ed」構文は使役の解釈も持つ。鷺尾・三原 (1997:15) は「英語における受動構文とはすなわち BE 受動文である」という強い前提があるため、これ以外に受動的な意味をになうことがあっても受動構文とは言えない、と言う漠然とした論理が働いてい

た可能性がある」と述べている。これは非常に興味深い分析である。日本語では間接受け身も直接受け身同様に使われる。この違いが、日本語話者の受動文理解にある意味妨げる可能性もあるのではないか。更に、鷺尾・三原（1997）は HAVE 構文は上位概念として使役、そしてその中に受動が含まれていると論じる。

### 3.2 日本語文法学会編（2014）

この節では、日本語の受動文に関する先行研究分析として日本語文法学会編（2014）を紹介する。日本語学の枠組みで様々な現象に明快な説明を与える同書の「れる」、「られる」についての説明を紹介することから始めよう。

#### (15) 受身文：

- a. 次郎が太郎にほめられた
- b. 太郎が次郎をほめた
- c. 会議が（議長によって）招集された
- d. 議長が会議を招集した

（日本語文法学会編（2014:52））

ここでは、(15b,d) の能動文が (15a,c) の受動文と対応している。

#### (16) 自発：通常意志的に行われる行為が、行為主体が意識しないのに（意志に反して）実現すること

- a. 居眠りをしている学生がちらほら見られる。（知覚）
- b. 8回裏のスクイズ策が悔やまれる（感情）
- c. 私には、太郎の態度が好ましく思われる（認識）

（日本語文法学会編（2014:258））

自発に分類できる用法の中にも知覚、感情あるいは認識という異なる用法が見られる。

#### (17) 可能

納豆を食べる⇒納豆が食べられる

（日本語文法学会編（2014:316））

この可能の用法に限り、「食べれる」と言う形式も時に口語では使われうる。

#### (18) 尊敬

～（ら）れる

（日本語文法学会編（2014:366））

すなわち、「れる／られる」には少なくとも4つの用法

がある。このことは、広く知られていることではあるが、受動文の理解を妨げる要因になっているのではないだろうか。例えば、次の例文（19a）には受け身、可能、尊敬の読みが可能である。

#### (19) a. これくらいの量であれば食べられるよ。

b. これくらいの量であれば、これだけの人がいたら全部食べられるよ。

c. これくらいの量であれば、おなかが空いている人なら食べられるよ。

d. これくらいの量であれば、小食の杉本先生も食べられるよ。

少し文脈を与えると、(19b) = 受け身、(19c) = 可能、(19d) = 尊敬の読みしかない、とまでは言えなくても少なくとも優勢な読みであろう。このように日本語の「れる」、「られる」には多様な用法と解釈がある。これを英語に置き換えて考えるとどうなるのだろうか。

### 3.3 Huddleston, Pullum and Reynolds (2022)

Huddleston, Pullum and Reynolds (2022)（以下 HPR (2022)）は情報構造（Information Structure, 以下 IS）との関連において英語の受動文を分析している。まず以下の例から見てみよう。

#### (20) a. A storm damaged the roof.

b. The roof was damaged by a storm.

#### (21) a. I bought a new guitar.

b. ?\* A new guitar was bought by me.

IS の観点から見ると、旧情報、すなわち聞き手／読み手がすでに知っている情報が主語位置にあり、新情報すなわち聞き手／読み手がまだ知らない情報が文末に生じる方が好ましい。この点からすると、(20b) は定名詞句が主語、by 句に不定名詞句が入っており、好ましい構造をしている。とは言え、HPR (2022) は「主語 = 定名詞句、文末 = 不定名詞句」を weak preference と呼んでおり、(20a) も問題なく容認される。興味深いのは、(21b) は IS の観点からすると文末に代名詞の me が入っており、容認度が低いことである。とは言え、もしこの文が「あの音楽に興味などなかったはずの私」によって買われたという文脈で、かつ me に強勢が置かれた場合は容認されると言う点である。この点については次節で述べる。

次に HPR (2022) は能動文と受動文の語彙的な制限について述べている。

- (22) a. The town boasts a great beach.  
b. \*A great beach is boasted by the town.
- (23) a. Max totally lacks tact.  
b. \*Tact is totally lacked by Max.
- (24) a. Jill has three wonderful kids.  
b.\*Three wonderful kids are had by Jill.
- (25) a. The jug holds three litres.  
b. \*Three litres are held by the jug.  
(HPR (2022:367))

ここで示される *boast*, *lack*, *have*, *hold* などの動詞はその語彙特性として能動文しか取らない。次に受動文の意味的曖昧性について HPR (2022) は論じている。

- (26) a. Her phone was broken.  
b. 彼女の電話は壊れた  
c. 彼女の電話は壊れていた  
(HPR (2022:369), 日本語訳は筆者)
- (27) a. They were married.  
b. 彼らは結婚式を挙げた  
c. 彼らは婚姻状態にあった  
(HPR (2022:369), 日本語訳は筆者)

(26&27a) は (26&27b,c) に提示する意味の曖昧性を持つ。HPR (2022) は (26&27b) の読みを event 読み、(26&27c) の読みを state 読みとしており、(26&27c) の読みを持つ文を *adjectival passive* と呼ぶ。それに対して、(28a,b) は event 読みしか持たない。

- (28) a. Her phone got broken.  
b. They got married.

つまり、*be* 受動文は event, state 両方の読みを持つが、*get*, *look*, *stay* などを使った受動文は event 読みしか持たないのである。

本節の最後に、対応する能動文を持たず受動文しかない例を挙げる。

- (29) a. It can't be helped.  
b. I'm honored to be a chair at this meeting.

(29a) における *help* は「なんとかする、避ける」と言う意味であるが、"We can't help it." という能動文は存在しない。また、"We honor you to be a chair at this meeting." という能動文も存在しない。

以上、本節で述べたことをまとめる。[1] 能動文と受動文は対応していることが多いが、語彙特性として受動態を持たない動詞もある。[2] 日本語の「れる」、「られる」には多様な意味用法があり、それらを使い分ける必要がある。[3] 語彙特性として能動文しか取らない動詞がある。[4] その一方で受動文しか取らない動詞もある。

#### 4. 日本語と英語の比較の観点から見るより本質的な受動文の理解法とは

中村 (2022) は英語の *-ing* 形、*-ed* 形を理解する方法として以下の図式を提案した。

- (30) a. Nicole's job bores her. → Nicole's job is **boring**.  
S V O  
= 人を退屈にさせるような→つまらない  
b. My job interests me. → My job is interesting  
S V O  
= 人に興味を持たせるような→興味深い  
c. My job satisfies me. → My job is satisfying.  
S V O  
= 人を満足させるような→満足感が持てる  
↓

A. 他動詞の *-ing* 形 = 人を - させるようなと考えれば良い。

- [1] Depressing = 人を落ち込ませるような→憂鬱な  
[2] Tiring = 人を疲れさせるような→しんどい、疲れる  
[3] Amazing = 人を驚かせるような→驚くべき  
[4] Fascinating = 人を夢中にさせるような→魅力的な、うっとりさせるような  
[5] Entertaining/amusing = 人を楽しませるような→ワクワクする、楽しい  
[6] Surprising = 人を驚かせるような→驚くべき  
[7] Rewarding = 人に報酬を与えるような→価値ある、報いがある、報われる

- (31) a. I'm bored with my job. = 仕事に退屈させられている→飽きている  
b. I'm not interested in my job. = 仕事に興味を持たされていない→興味がない  
c. I get very tired of doing my job. = 仕事することに疲れさせられている→疲れている  
d. I'm not satisfied with my job. = 仕事に満足させられていない→満足していない  
↓

B. 他動詞の *-ed* 形 = - させられている→- していると考えれば良い

- [1] I'm bored = 退屈させられている→退屈している



- [2] I got hurt= 傷つけられた→傷ついた  
 [3] I was tired.= 疲れさせられた→疲れた  
 [4] I was humiliated= 侮辱された→傷つけられた／恥をかいた  
 [5] I was satisfied. = 満足させられた→満足した  
 [6] I was impressed/moved/touched= 心を動かされた→感動した

更に、中村 (2022:7) は『他動詞の *-ing* 形が「人を～させるような」から派生して「～する」となり、他動詞の *-ed* 形が「～させられる」から「～する」の意味になる、という本質さえ理解すれば、*-ing* 形と *-ed* 形を間違えることなく理解できる』と述べている。しかし、本論の議論の内容を踏まえると、それだけでは不十分であることが分かる。では、何が足りなかったのだろうか。

#### 4.1 対応する能動文がある受動文の理解方法

- (32) a. Nicole's job bores her.  
 b. Nicole is bored with her job.  
 (33) a. My job satisfies me.  
 b. I am satisfied with my job.

まず、この2文から検討したい。(32&33b) は本当に(32&33a) と対応しているのだろうか。形式的には受動文であっても、受動形が形容詞化してしまっていると考えるのが妥当ではないだろうか。その証拠が、*bored*, *satisfied* が共に前置詞 *with* を取っていることである。もしこれらが動詞の過去分詞形であり、*be+ bored/satisfied* という受動形式であれば、前置詞は動作主 (agent) を示す *by* となるはずである。*By* を取る形式は認められ、容認されはする。しかし、*with* を伴う形式の方が良く使われることは明白である。更に次の例文を見よう。

- (34) a. My job interests me.  
 b. I am interested ✓ in/\*by my job.

(34b) では、*by* を使う形式はほぼ容認されない。このことは、*interested* が完全に形容詞化していることを示している。こう考えると、「仕事に興味を持たせる⇒私が仕事に(よって)興味を持たされる⇒興味を持つ」という図式では十分には説明できないことになる。

以下に更なる例を挙げる。

- (35) a. The news of their marriage surprised us.  
 b. We were surprised at the news of their marriage.

- (36) a. The baseball game excited me a lot.  
 b. I was excited at the baseball game a lot.  
 (37) a. His way of talking always amazes me.  
 b. I am always amazed with his way of talking.

ここで注目しなければならないのは、(35-37b) を日本語として捉えた場合どうなるのかである。「驚かされる⇒驚く、ワクワクさせられる⇒ワクワクする、楽しまされる⇒楽しむ」という「他動詞の受け身形⇒自動詞的」な捉え方をしているだろうか。「驚かされ、結果的に驚く」のではなく、「知らせを聞いた瞬間に驚いた」のではないだろうか。ここに、英語と日本語の受動形の捉え方の違いの本質が見えてくる。英語ではあくまでも「能動文に対応する形態としての受動文」の色合いが濃いものに対して、日本語では受動文と言うよりも、もともと自動詞の色合いが濃い。つまり「驚かされた」という意識がそれほどなく、「驚いた」と表現する。更に、以下のような例文を考えたい。

- (38) a. 先生が僕の論文を批判した  
 b. ?僕の論文が先生によって批判された  
 c. 僕は論文を批判された  
 (39) a. The teacher criticized my article.  
 b. My article was criticized by the teacher.  
 c. I had my article criticized by the teacher.

英語では(39a-c) を使うのに対し、(38b) のような直接受動文は日本語では違和感がある。更に、以下のような例文も見てみよう。

- (40) a. 先生が僕のレポートを褒めた  
 b. ?僕のレポートが先生に褒められた  
 c. 僕は先生にレポートを褒められた  
 d. 僕は先生にレポートを褒めてもらった  
 e. ?\*僕のレポートが先生に褒めてもらった

やはり(40b) のような直接受動文には違和感がある。更に、(40c) も、非文とまでは言わなくても、違和感がある。つまり、本学大学院生稲垣導彦氏が指摘する(私信) とおり、日本語の受動文には一般にネガティブな印象があるので、「～され、その結果嬉しかった」と言いたいときには(40d) のような「～もらった」という表現を使う方が自然である。一方で(40e) のようにするとかかなり違和感がある。

以上、本節をまとめたい。日本語では能動文と受動文の対立あるいは対応で説明できる部分とできにくい部

分がある。つまり、受動文を「～されて、その結果～した」という図式ではなく、もともと「～した」と言う一種の自動詞的な図式で受動文を捉える方が分かりやすい。

## 4.2 対応する能動文を持たない受動文

更に、以下のようなそもそも受動文とはみなされにくい表現もある。

- (41) a. I'm fed up with my job.  
 b. I was born in Boston.  
 c. ?\*My mother bore me.

本来は「食事を与える」という意味を持つ他動詞 *feed* の過去分詞形であり、「be fed up = 食事を十分に／十分すぎるほど与えられる⇒結果的にうんざりする」という意味拡張が起こったと考えられるが、(41a)に対応する能動文は存在しない。(42)でも、元々は他動詞 *bear* が「子どもを産む」という意味を持っていたが、その意味が希薄になり、「母親が子どもを産む出来事を引き起こした⇒子どもを産む出来事が引き起こされた⇒産まれた」という意味拡張は起きていないとは言えないが、ほぼ希薄になってしまい、*be born* が自動詞のように産まれるという意味を示す。つまり、(41c)とはほぼ言えない。

## 4.3 4.1節、4.2節を踏まえた日英比較対照による受動文のより本質的な理解方法

1節、2節で日本語の受動文の捉え方について考察してきた。対応する能動文を持つ受動文では、「～された⇒その結果～した」という図式ではなく、もともと「～した」という捉え方を持つことが多い。更に、そもそも対応する能動文を持たないあるいは設定しにくい受動文があることを述べてきた。ここで、受動文を理解する支柱としての「する」と「なる」の違いに言及したい。

- (42) a. His behavior irritated me.  
 b. I was irritated by his behavior.  
 c. I was just irritated.

- (43) a. 彼の態度が私を苛々させた  
 b. 私は彼の態度に（よって）苛々させられた  
 c. 私はただ「苛々させられていた」⇒「苛々していた／苛々した」

英語では(42a)「彼の態度が僕を苛出させた」という能動文に対応して(42b)の受動文がある。つまり「[1] 主語が目的語を苛立たせた⇒[2] 目的語が苛立たされた」

と言う図式が成立する。一方で日本語では[1,2]の過程を飛ばして「結果的に苛々した」と言う捉え方をする。つまり、能動文⇒受動文という対応関係が明示されない。これは、日本語がまさに、池上(1981)のいう「なる」的言語であることを示している。「何かによって苛立たされた」つまり(43a)という一種の擬人的な動作主-被動者主関係がありはするものの、それよりも「苛立った状態になる」ことを前面に出す。つまり、「苛々していなかった状態⇒苛々した状態へ」と変化が起こり、その結果として(43c)「苛々し(てい)た」ことを示す。

一方、(42a)は、動作の主体を明示し、責任の所在を明らかにする英語の特質を明示している。(42b)が示したいことは、私が「苛々させられる被害に遭った」と言うことであり、あえて *by* 句を示すとその主体が *his behavior* であることが示される。この構文では *by* 句が新情報を示し、「私が苛々させられた」ことは分かっており、それが何によってか、と言うと「彼の行動によって」です、という IS の流れとなる。更に言うと、(43c)で動作主を示す *by* 句が現れないのは、それを省略してでも、話者が苛々させられたことを重視するからである。ここでもやはり、「苛々させられた」という、何らかの被害に遭ったことが示される。つまり、英語では主体を明確に示す傾向があるので、「主語／動作主が目的語／被動作主を～させられた状態にさせた／おちいらせた」という図式が成り立つのである。これは池上(1981)の言う英語の「する」言語的な性格を明示するものである。これに対応する受動文は、「目的語が～させられた」と言う文であり、主語=動作主、目的語=被動作主という関係は受動文でも維持される。

この節の最後に、英語の中間構文に言及する。

- (44) a. This book sells well.  
 b. This book reads easily.  
 c. This car drives really well.

- (45) a. この本はよく売れる  
 b. この本は簡単に読める  
 c. この車はとてもよく運転できる

(44a-c)のような英文を中間構文 (*middle constructions*) と呼ぶ。一見すると「英語=能動文、日本語=受動文」であり、「英語=受動文⇔日本語=自動詞構文」という対応をする」と今まで述べてきたことの反例となりそうである。しかし、実際には「～れる」という日本語の形式は可能を示しており、受動文ではない。実際(45c)は「～れる」とも表現されえない。

## 5. 結論

以上のように、本論文では英語と日本語の受動文の対応関係について論じてきた。英語では「動作主+動詞+被動作主」という能動文があり、それに対応して「被動作主+V-ed」という受動文が成立する。この背後には、英語が「する」型言語であることがあると論じた。一方、日本語では「動作主+目的語+V-rareru ⇒ V-suru」という対応関係があり、その背景には、日本語が「なる」型言語であることが関係していることを示した。つまり、「動作主+被動作主+V-rareru」に対応する能動型があるとの意識が希薄である。更に、英語の「have+目的語+V-ed」形式は日本語の間接受け身に対応する場合もあるが、この形式は使役の意味であることの方が多く、常に日本語の間接受け身と対応しているわけではないことも論じた。

このような言語間の差異を認識することで、英語の受動文に対応する日本語の自動詞的構文、更には英語の「have+目的語+V-ed形式」に対する日本語の間接受け身という関係に対する本質的な理解が得られる、と本論文を結論づけることができる。

## 6. 参考文献

- Rodney Huddleston, Geoffrey K. Pullum, and Brett Reynolds (2022) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 中村浩一郎 (2022) 「大学における『英文法』のより効果的な教授実践と英語教育に関する提言」『名桜大学教員養成支援センター年報』第7巻名桜大学教員養成支援センター - 編、1-13.
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法辞典』大修館
- 鷲尾龍一・三原健一 (1997) 『日英比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社

